

## 【一般口演3】 第13席

## 病証研究試論 (劉完素)

東京 宿野 孝

私たちが関わっている中国医学の世界は、現在最も生活に浸透し、認められている科学の世界とは、全く質を異にしている。科学の世界においては、より精度にコントロールされた環境下の実験の元に新しい知見が見いだされ、古い誤った知識を飲み込み塗り替えながら発展していく。しかし中国医学のそれは、発生も発展も科学のそれと同様に語ることはできない。現在中国で教科書化されている中医学が、たとえ歴史上最も整理されているものと評価できたとしても、それが現時点で最も正しくて、過去の中国医学は現代中医学よりは間違っているとは言えないのである。中国医学をより正確に評価するためには、私たちは歴史的な流れを含めて、これを検討していくことが要求される。

その独特な要素と関係性で有機的に絡み合っ構成される中国医学の世界において、人の体の状態をどの様にとらえるか、どの様に表現するかは、その中でも最も象徴的な部分であると思う。この病の表現の仕方を追求するのが病証研究の分野であると考え。

しかし、この病証に対する追求の仕方、研究の方法論といったものが現時点で成熟しているとは言い難い。研究とは恣意的なものでもあるから、様々な在り方もあり得るし、確立される類のものではないかもしれないが、それでも病証研究のモデルとなる報告は多くないように思われる。

今回の報告は、手順的にとても研究と呼べる代物ではない。これは病証研究にどのような視点をもてるかを検討してみた試論である。

検討対象は、ある一つの病証を選択して歴史的に通観するのではなく、ある一つの書籍を扱うものでもなく、中国医学史上様々な病論が提出される時代の人物に絞ってみた。金元の四大家の一人として称される劉完素である。彼の著作である『素問玄机原病式』『宣明方論』を中心に幾つかの検討を試みた。